

身毒丸

——しんとくまる——

作

寺山修司  
岸田理生

1 慈悲心鳥

(夕暮れの街。

様々な格好の人々が様々な足取りで現われては去り、現われては去ってゆく歩道。そのざわめき。

上手には電柱があり、薄黄色い電灯が心細気にまたたいている。  
群衆の中から立ち現われ、電柱の下で立ち止まる身毒丸。)

身毒丸

まなざしの

おちゆく彼方ひらひらと

蝶になりゆく

母のまぼろし

てのひらに

百遍母の名を書かば

生くる卒塔婆そとばの

手とならむかな

(眩き、誰にともなく、)

アノ、つかぬことを伺いますが、この近くに鉄道線路はないでしょうか。数日前、すぐ近くで汽笛の音をきいたのですが、どう歩いても、線路が見つかりません。ぼくの乗る汽車はもう発ってしまったのか、それともまだ来ないのか……。ねえ、きみ、ぼくは迷子になってしまったのか。ぼくは自分の乗る汽車が見たい。その汽車は死んだ母の許へとぼくを連れて行ってくれる筈なのです。母のいる場所が、どんなところだろうとぼくは構わない。死んだ母に一目会いたい……。ああ、また汽笛が……。

(うづくまる身毒丸。)

(と、合唱曲が流れ込んで来る。)

流涕焦がれて嘆かるる

いまは嘆きてかなわじと

時合かなえは鳴る鐘や

(ごうん ごうん ごうん)

これは夢かや 現かや

現の今のかなにかとて

年にも足らぬそれがしを

ひとり残して十六夜に

母は先立ちたまふぞや

母は先立ちたまふぞや

## 2 蛇娘

(一陣のつむじ風が通りすぎてゆく。

と、背後の暗がりに明りが射し、芝居小屋の廢墟が浮かびあがる。

身毒丸の家の小間使いと、奇妙な仮面をつけた仮面売りとが話しこんでいる。)

小間使い 萩、尾花、葛、男女花、藤袴、桔梗とかぞえて、一つ忘れた秋の七草。

仮面売り その秋だったなあ。ここにあった旅芸人の小屋がつぶれたのは。

小間使い そうそう。でも、境内、天幕の裡、そうして外の墓地まで、どっと笑いが湧き、

拍手喝采のあったのは、もう何年も前の話。

仮面売り その内に秋風の吹くにまかせて集まる客もなく、ときどき木戸銭も払わずに駆け

こんで来た近所の子供たちが、かくれ遊びに蓆をめぐったり、垂らしたり……。

小間使い　ふいに泣きだして、救いをもとめたおさなごも、下足番に認められて、いまはひとの子の母。

仮面売り　かげ草は、さがが赤くなつてのび放題。ときどき、唐草模様の風呂敷包みを持つて夜逃げしていった電気の裏方の噂がでるほかは、これといって大事もなくなつてしまつた。

（廃墟の一角に明りがともる。〈母を売る店〉である。戸口には『社会慈善・母のない子に母親をおわけします』と大書されている。）

小間使い　追いつめられた一座は、喰いつなぐために娘たちを売りはじめた。

仮面売り　そうそう。旅から旅への娘たちが髪を結びあげ、合わせ鏡に撫子の花をかくして、いそいそとうしろ姿で小屋を捨てた。

小間使い　売り文句は一応社会慈善を装つての仏方便。「母のない子に母親をおわけします」とは、立派じゃないか。

仮面売り　買いにくるのは、女房に逃げられた米屋町の大工とか、飲んだくれで子無しの車引きばかり。それでも近頃じゃ、先妻に死なれた巡査や学校の先生が、子の手を引いて後妻を買いにくる。

小間使い　いえさ、私もね。ここで旦那様と坊ちやまを待っているんだ。旦那様が、どうしても後妻を見つけないと言うのでね。

仮面売り　その隙に、ちよつと逢引き。

小間使い 暇もない体だからね。ああ、来た来た。ここですよ、旦那様。

仮面売り 大声を出すのは、後にしてくれ。

(慌てて姿を隠す仮面売り。)

身毒丸の父がやってくると)

父親 いや、探した探した。身毒は、まだかね？

小間使い あそこでございますよ、旦那様。

(父親、電灯の明りで一葉の写真に見入っている身毒丸を見つけ、近づく。)

父親 また、そんなものを見ている。いい加減に死んだ母さんのことは忘れるんだ。

(不承不承、写真をしまう身毒丸。)

父親は、身毒丸と小間使いを連れて、〈母を売る店〉に入る。

並んでいる女達。全員が『母』と書かれた仮面をつけている。)

父親 どうだ、身毒。どのお母さんがいい？

身毒丸 何度も言ったでしょう。僕は贖物のお母さんなど欲しくはない。

父親 そうは行かない。お母さんと言うものは、『家の光』だ。夕方になると、家の光を

つける。夕御飯をこさえて、お父さんと子供を待つ。お父さんと子供は、家の光を目当に

帰って来て、ただいま、と言う。するとお母さんは、お帰りなさいと迎える。それが正し

い家のあり方だ。儂には家という容れ物があり、職業がある。銀行には金があるし、仏壇

には家系図がある。台所には小間使いがいるし、子供部屋には、おまえという子供がいる。

あれがあり、これがあって、ないのは、お母さんだけだ。お父さんは、もう決めたよ。今日こそは、新しいお母さんを買って帰る。

小間使い　でも、旦那様。元をただせば、旅から旅の女芸人でございますよ。

父親　だからいいのさ。どんな家だろうと、家には屋根がある。昼がある。その居心地の良さは旅の空では味わえないものだ。大体のことは、我慢して一生懸命に居つこうとするに間違いはないよ。さあさあ、身毒、どれがいい？

(交声曲が流れ込んでくる。)

深くあわせた　胸のうえ

片手をのせて　しつかりと

乳房おさえた　気強さは

蒼味あおみを帯びて　もの凄く

なむあみだぶつ　まま母の

蛇性じゃせいをひめた　寝姿の

その黒髪に　見とれつつ

美しさゆえ　子は妬ねたむ

(不意に夢から醒めたように起きあがる一人の女。)

仮面をはずすと、あたりを見まわし、寝姿の丸髻をほどき、黒髪のなかにか  
くしてあった撫子の花をとり出す。

女は撫子。なでしこ

その撫子の姿を見て、打たれたように体を固くする身毒丸。）

撫子  
七草に

かぞえ忘れし撫子が

火傷の痣とあざ

なる女かな

（眩く。）

父親  
決めた。あの女が新しいお母さんだ。

### 3 家族の肖像

（家の光のともる下で、撫子、父親、身毒丸、そして撫子の連れ子のせんさく  
が夕御飯を食べている。

おだやかな光景。

父親が空の徳利を取り上げ、

父親 もう一本。

撫子 はい。でも、あと一本だけですよ。

（徳利を持って、台所へ消える。）

せんさくの皿は既に空。せんさく、ちろりと身毒丸の皿を見る。それを察して、皿の上の総菜をせんさくの皿に乗せてやる身毒丸。）

せんさく ありがとうございます。

身毒丸 おまえは、まだ子供だからね、沢山食べなくちゃいけないよ。

せんさく うん。

（嬉し気に食べる。）

戻って来た撫子が、身毒丸の皿を見て、

撫子 また、せんさくに分けてやったのですね。おまえは、まだ子供だから、沢山食べな

くてはいけないと言うのに。

（自分の皿の総菜を身毒丸の皿に乗せてやる。）

さあ、お食へ。

身毒丸 ……。

(そのやりとりを見ていた父親が)

父親 儂はもう老人だ。こんなに食べられない。

(と、自分の皿の総菜を撫子の皿に乗せる。)

食べなさい。

撫子 はい。

(食べる。)

どうしたの、身毒。食べなさい。

身毒丸 おなかが空いていないのです。

父親 それは、わがままと言うものだ。折角<sup>せっかく</sup>、お母さんが分けてくれたんだ。食べなさい。

身毒丸 ……はい。

(眼をつぶるようにしてかっこむ。)

満足気にそれを見ている撫子。

一陣の風が家族の肖像をかき消してゆく。)

4 影絵の怪

(舞台片隅にぼんやりと明りがともる。  
行水をしている身毒丸。  
と、やって来た撫子が)

撫子 背中、流そうか。

身毒丸 あつちに、行って下さい。

(激しく拒絶する。)

撫子 ……そう……。馴染なじんでくれないんだね。

(肩を落して去ろうとすると、せんさくが湯を運んでくる。)

兄さん孝行かい？ いい子だね。

(せんさく、笑うと、運んで来た湯を身毒丸の背にかけ、洗いはじめる。  
物陰に隠れて、その様子を見ている撫子。)

舞台中央奥には、一枚の白布。  
そこに影絵が映っている。

撫子の影が父親の影を按摩あんましている。）

父親の声　ああ、極楽極楽。家があつて、お父さんがいる。家があつて、お母さんがいる。

家があつて、子供が二人もいる。その上、仏壇があつて、御先祖さまも山いりといる。儂は満足だよ。

撫子の声　子供が二人いると言っても、せんさくは私の子。身毒は、あなたの子。私は、あ

なたと私の子が欲しい。

父親の声　それは、おまえ、欲張りというものだよ。表通りの長者の家じゃ、三つの蔵に金がうなっているというのに、子がなくて、明け暮れ神頼みをしているそうさ。それなのに儂とお前が子を成したりしては、どんな陰口を叩かれるか、わからん。貧乏人の子沢山、とかね。成程、この家は長者の家程、金持ちじゃあないが、さりとて、貧乏という訳でもない。身毒とせんさくに、多少なりともなにがしかのものを遺してやる位の財産はある。子が三人になつては、取り分が少なくなつて、身毒もせんさくも、かわいそうさ。

撫子の声　でも……。

父親の声　それに儂は、もう年だ。あつちのことより、按摩が極楽。大の満足。

（言うと、大いびきをかいて眠ってしまう。）

撫子の声が、渴かえて、「あなた……」と呼んでも、いびきが高くなるばかりだ。）

撫子の声　この家に来て、三月になるのに、一度も……。

(間を置いて)

世間は知らずとも、せんさくは捨て児。私が腹を痛めた子じゃない……。

(影絵が消える。)

覗かれている気配を感じて、振りかえる身毒丸。

隠れ損ねた撫子と眼が合い、一瞬、瞞め<sup>みつ</sup>合い、やがて、どちらからともなく  
眼をそらす。)

## 5 鬼子母変

(家の光がポツともる。)

父親がせんさくの手を引いて現われると、)

父親 さあさあ、「家族合わせ」の時間だ。お母さん、身毒、せんさく、はじめろぞ。

(呼びたてる。)

台所から撫子が、仏間から身毒がやってくる。)

撫子 後片付けも終わりました。はじめましょう。

(四人、それぞれに向い合って坐る。)

父親が札を配る。配りながら)

父親 お父さんがいて、

撫子 お母さんがいて、

(身毒が、「お兄さんが……」と言うより早く、せんさくが)

せんさく お兄さんがいて、

(言って、身毒に笑いかける。)

又、身毒が「弟が……」と言いかけると、それを遮切るようにして、撫子が)

撫子 弟がいて、

(言うと、せんさくに笑いかける。)

うつむいて、手の中の札を見、驚く身毒。)

父親 犬がいる。

撫子 一番早く、手の中に家族を作ったものが勝ち、というのが「家族合わせ」です。

(父親が身毒をうながそうとする。それを遮切るように撫子が「さあせんさく」と命じる)

せんさく はい。お父さん、家尾守家のお母さんいえをまもるけを下さい。

父親 ありません。お母さん、かねのなるきちけ金野成吉家の子供を下さい。

撫子 一枚とられました。せんさく、くにをまもるけ国尾護家の犬を下さい。

せんさく ありません。お父さん、家尾守家のお母さんを下さい。

父親 ありません。さつきもありませんと言った筈だ。お母さん、金野成吉家のお母さん  
を下さい。

身毒丸 ぼくの番がまわってこない。同じ札を四枚ももっているのに。

父親 お母さん、金野成吉家のお母さんを下さい。

身毒丸 その札なら僕が持っている。

撫子 いいえ、ありません。私の番です。せんさく、国尾護家のお母さんを下さい。

せんさく ありません。お父さん、家尾守家のお母さんを下さい。

父親 ありません。お母さん、金野成吉家のお母さんを下さい。

撫子 ありません。せんさく、国尾護家のお母さんを下さい。

せんさく ありません。

(身毒を除け者にして「母札探し」がくりかえされる。

その間に家を抜け出す身毒丸。他の三人はそれに気付かない。)

撫子 どこにも母札がない。

せんさく はい。いくらやっても母札が集まらないことには、「家族合わせ」の勝負にはなりません。

撫子 ということは、

せんさく 誰かが母の札を一人占めしているということです。

撫子 誰かが、母の札ばかりを……誰が？

(家の明りが停電したように消える。)

外の闇の中に立ち尽くしていた身毒丸が不意に叫ぶ。)

身毒丸

母札なら僕が持っている。

(手にした四枚の母札を夜空に投げ上げる。)

(合唱曲が流れ込んで来る。)

じじいと汗ばむ手のなかの

家族合わせの

母札は

夜の小川に流そうか

それとも空地に

埋めようか

ひとり去いにたい

あの町こえて

去んであなたの顔みたい

寺へ三年

米屋へ五年

奉公しようか 家出よか

鬼のまま母

また洗い髪

白いうなじが うつくしい

憎い 憎いと

じゃまものにされ

いつのまにやら 土人形

土の人形も

あなたを追って

町をこえればひとになる

6

髪切虫

(合唱が続く間、星空を見上げている身毒丸。  
やがて、せんさくが身毒丸を探しに来、見つけると黙って地面に落ちた母札  
を拾い集め、兄の手を引いて歩き出す。)

(身毒丸が硝子壘がらすびんを前にかがみ込んでいる。  
そっと現れて、背後から眼かくしをする撫子。)

撫子 うしろの正面だあれ？

身毒丸 手を離せ。

(叫んで激しい拒絶の身振り  
で撫子の手を振りほどく。  
撫子、傷つくが、ぐっところらえて)

撫子 何をしているのです？

(身毒丸、壘を隠そうとするが)

それは？

(素早く壘をとり上げる。)

まあ、虫だ。黒天鷲絨かエナメルのように光っている。長い触角がまるで鉗はさみ。

(奇妙な笑いを浮かべる身毒丸。)

身毒丸 髪切虫。

撫子 髪切虫？

身毒丸 キッチ、キッチ、ギイギイ。女の髪を切って食べるんだ。誰かさんの髪を。そう、

真夜中に。眠っている間に。

(撫子、思わず、自分の髪に手をやる。)

撫子 恐ろしい虫。どうしてこんな虫を飼っているの？

身毒丸 返してくれ、友達なんだ。

(仕方なく壘を返す撫子。そのはずみに、身毒丸と撫子の手が触れ合う。)

一寸の間を置き、慌てて手を離す二人。

しばらくは無言でいるが、やがて口を開く撫子。)

撫子 身毒……。

身毒丸 ……。

撫子 私がこの家に来て、もう半年。おまえは決して心を開いてくれない。それどころか、せつかく家におさまったお母さんを、何とかして追い出そうとする素振りそぶばかりが見える。

『家族合わせ』の母札ばかりを一人占めしたりして……。

身毒丸 ……。

撫子 何故なの、身毒？ 私は、毎朝毎晩、家の仏壇に手を合わせて、おまえの、いいお母さんになろうとしているのに。

身毒丸 仏様をかわいがることで、子供をいじめることを差引きしようとしているんだ。

撫子 いじめる……？ 私が、おまえを？

身毒丸 そうさ。

撫子 いったって家族の中から抜け出してゆくのは、おまえの方じゃないか。

身毒丸 贗にせ家族だ。その中で僕一人が他人だ。ずかずかと土足で家に入り込んで来た誰かのせいだ。

撫子 ……。

(怯えたように身毒丸を覗めている撫子。)

(反対に身毒丸の口調は次第に激して来て、)

身毒丸 でも、見ている、その内、肺病で、見世物小屋で、蛇で、五十銭で、縄で、欄干で、

小児しょうにで、新聞記事で花見だ。今にきつと離縁されたのたれ死にだ。

撫子 やめなさい。やめるのよ、身毒。家に入って石鹼で口をお洗い。

身毒丸 くやしかったら折檻するといひ。継子の尻を撲つといひ。鬼……まま母……まま母

……まま母……

## 撫子

（追いつめられてゆく撫子。）  
身毒、ズボンを脱いで、お尻をお出し。

（叫ぶ、撫子。）

身毒丸、ズボンをおろす。

その尻を打つ、撫子。

何度も何度も、打つ。

身毒丸は黙って耐えている。）

（学校唱歌が流れ込んでくる。）

〱村ノ学校ノゲンカンノ

向ッテ右ノ桜ノ木

ワタシノ子ドモガ 植エマシタ

ソノ子ハトウニ 戦死シタ

コノ学校が立ッタトキ

ウチノ才墓ニアッタノヲ

死ンダアノ子が堀リダシテ

カツイデ行ッテ 植エマシタ

アノ子ハ十二デ桜木ハ

アノ子ノセイヨリ低カッタ

ソレガ今デハ学校ノ

二階ノマドカラノゾイテル

キツチ キツチ ギイギイギイ

キツチ キツチ ギイギイギイ

## 7 仮面売り

（無数の仮面をつけた車を曳き、奇妙な仮面をかぶった仮面売りがやってくる。  
走って来て、車とぶつかりそうになる身毒丸。）

仮面売り どうした？ まるで墓場から逃げ出して来たような勢いだな。

身毒丸 墓場より、もっと非道いところから逃げ出して来たんです。

仮面売り そこは？

身毒丸 まま母の手の平。あいつはぼくの尻をぶった。手の平でぶった。力一杯ぶった。

仮面売り 母親が子供の尻をぶつのは、そりや愛情というふうなものさ。

身毒丸 違う！ まま母はぶちたたくてぶったんだ。まま母の手の平の肉とぼくの尻の肉が、

ぶってぶたれて、赤くなった。どきどきと脈打った。

仮面売り 知っているかね？

身毒丸 えっ？

仮面売り 夫婦喧嘩は犬も喰わないが、親子喧嘩は河馬かばも喰わない。

(哄笑する。)

興奮を静める身毒丸。仮面車を見)

身毒丸 ずい分と顔がある。

仮面売り ああ。

(仮面の中に死んだ母の顔を探す身毒丸。)

身毒丸 でも、こんなに顔があるのに、死んだ母さんは、どこにもいない。

仮面売り ここにあるのは、生きている誰かの顔ばかりだ。死人の顔はないよ。

(がっかりする身毒丸。)

探しているのかね、死人を。

身毒丸 会いたいです。一目でいいから死んだ母さんに会いたい。

仮面売り だったら、これを貸してあげよう。

(黒い円形のボール紙のようなものを取り出す。)

身毒丸 何です、これは？

仮面売り 穴だ。

身毒丸 穴？

仮面売り そう、穴だ。

(不思議な穴のテーマが夜をつつみはじめる。)

これを、

ぴったりと壁に貼りつけると、そこから壁の向うへもぐっていかれる。

これ一つで、

世界中に出口ができる。

ゴムのように、

のびちぢみ自在、

持ちはこび自由、

こうして、小さくたたんで、

のぞき穴にすることも、

床の上にひろげておいて、

おとし穴にすることもできる。

身毒丸 信じられない。

穴を持ち歩くことができるなんて。

仮面売り ホラ、こうやって、

地面におくと、それでもう、

地下へ降りてゆくことも、

できるのだよ。

死人、というものは、大体、地の下にいるものだ。

身毒丸 ぼくの母さんも？

仮面売り はつきりと死んだのなら、きつといる筈だ。

身毒丸 母さんはぼくに、忘れないで、と言い残して死んだ。約束するよ、と、ぼくは言っ

た。ぼくは母さんを忘れないよ。父さんが忘れても、世界が忘れても、ぼくは母さんを忘れないよ。

(涙ぐむ身毒丸。)

仮面売りのおじさん。ぼくに穴を貸して下さい。

(仮面売りの手から穴を奪い取るようにして、地面におく。

と、昏くんで来る四圍。

同時に、白布のスクリーンに巨大な手の平が映ると、身毒丸を手招く。

五本の指が奇妙な生き物のようにうごめく。

ほんとに、地下へ降りてゆくことができるのだろうか？

深さはどの位なのだろう

梯子ははしこついてるだろうか

足をおいたとたんに

まっさかさまに落ちてゆく

なんてことはないだろうな

やあ、まっくらだ

地下も天と同じように

銀河がキラキラと輝いているぞ

母さん、今、行きます！

## 地獄のオシラガミ

(暗黒のなかで地を穿うがつようなひびき。

そして鍾乳洞の水滴音のようなこだま 硯。

ややあつて地獄の人びとが呼びかわしあう声が、蓮の糸で曼陀羅まんだらを織るよう  
に艶なまめかしく流れこんでくる。

そこはアジアの地下世界。)

(合唱曲。)

ゝなきははの めぐみも ふかき

やみのなか ほとけの ちかい

しるやしらずや

(目をつむった身毒丸が夢遊病者のようにさまよい出てくると、)

## 身毒丸

まいるより たのみをかくる

むらさきの くものゆくえが

ははのごくらく

(合唱曲が)

へのちのよを ねがう ころを

うらむまじ ふりむくたびの

ははのくろかみ

### 身毒丸

ふりむかば このよほろぶる

おとすなり ふりむくなかれ

むらさきのたび

(身毒丸の背後から、数人の母親、あるいは鬼子母<sup>きしぼ</sup>たちがゆつくりと集まってくる。

女たちは口々に、「我が子やーい！ 行方不明のわが子やーい！」と叫んでいる。

虎落笛<sup>ちがりぶえ</sup>の吹き荒ぶ<sup>すさ</sup>なかで、一人の母は娼婦になって手招きし、一人の母は地獄を赤児のように背負って救いを求め、一人の母は巡礼すがたで、鈴を鳴らしている。また一人は、モンペ袴に防空頭巾をかぶって身毒丸の名を呼びつづけ、母たちは、次第に身毒丸をとりかこみ、手をつないで輪になってゆく。

その輪の中でかがみこみ、膝には大切そうに髪切虫の青い壘を乗せ、両手で  
目かくしする身毒丸。

(合唱曲。)

へ生みの母

育ての母

名付の母

義理の母

かごめ

かごめ

かごのなかの母は

いついつ出やる

よあけの晩に

しんとく丸が

笛吹いた

うしろの正面

だあれ？

## 身毒丸

(いつのまにか、一人の喪服の女が入ってきて、手をつないだ母たちの輪に加わり、身毒丸の後に立っている。

一人だけ、長々とした緑の黒髪が地獄の月に照っている。

身毒丸、かがんで目かくしをしたまま)

ぼくのほんとの母は、ぼくを産んだために死んだ、と言うことだ。

徳福を願って、神の憎しみを蒙こうむったのだ。

それは火事の夜の出来事だった。

炎に包まれたぼくを抱いた母鳥に父は言ったのだ。

「命があれば、子をば儲けてまたも見ると。」

だが母は、

「一つの巢ごもりになるだにも、

世にも不びんと思いに、この子においてはえ捨てまい」

と、おのれを野火に焼け死んで、ぼくの命を救ったのだ。ぼくはその、

仏の母の顔がみたい。

見てはいけないうしろの正面、

あなたの顔を見てみたい！

(と、パツと顔をかくした手を外してふりむくと、うしろの正面に立っているのはママ母の撫子だ。)

ああ、あなたは、

(と、けたたましく、ママ母の撫子は呖笑し、どっと合唱が流れ込んでくる。)

しど

しど

ぼさつ

あられりうま

かみに

かんざし はなふぶき

ちどり

ちのみご

ちまみれの

ママこいじめの ままははが

おう かわいやの

のう かわいやの

でん でん

たいこに

しよのふえ

ふえにうかれて おどりだす

てるてるぼうず にか おおがない

ぼうや かわいや にて くおか

やいてくおうか

おにのめん

しど しど ぼさつ

あられりうま

(哄笑と地獄の祭ばやし、そして暗黒の花吹雪。

女はすべて母となって狂いおどり、百のてるてる坊主が、ころげおちて、の

たうちまわる。)

### 身毒丸

畜生！ だまされた！ 髪切虫出て来い！ 出て来て、女どもの髪を切ってしまった  
てくれ！

(叫ぶ。

ゆつくりと、三メートルもあるような髪切虫が暗闇から姿をあらわし、ま  
ま母に向かって、二、三歩あるきだしたところで、拍子木一つ打たれ、悪夢は

消える。

(暗転の中で歌われる歌ひとつ。)

秋風や

ひとさしゆびは

だれの墓

ひとさし指に

経文きょうもん書いて

遠い他国にとばしたや

なむあみだぶつ

とびたまへ

なむあみだぶつ

とびたまへ

9 母の写真

(撫子が小間使いと一緒に、いくつも置かれた写真額を磨いている。死んだ御先祖さまの額だ。)

撫子 あの子はどうして心を開いてくれないのだろう。

小間使い どうしてでございますかね。

撫子 この家に来て、春、夏、秋、冬、春、夏、秋、冬………。もう二年もたつというのに。

小間使い どうしてでございますかね。

撫子 私はと言えば、朝、暗いうちから、廊下に茶の間を這いまわって拭掃除。竈かまどを焚く。水を汲む。豆腐を買いに走るのも、豆腐屋を追いかけてつかまえるのも、みな私の役。酒屋には言い訳。米屋には平あやまり。質屋には顔なじみ。大家にはごきげんとり。客がくれば茶を淹れて、三時すぎれば夕飯の支度にかかって米をとぐ。皿を洗うだけでもいい加減水がつめたいところへ持ってきて、洗濯がある。それがすめばすんだで、暗いあかりで足袋をつぎ、ひびあかぎれの手を息であたため、肩も腰もさするわ、揉むわ、で、その挙句が床のあげおろし、枕の被おほいを取りかえて、おやすみなさいまし、だと言うのに。

小間使い どうしてでございますかね。

撫子 あの子は、身毒は、二年の間に、すっかり身体は大人になったというのに、することは、まるで子ども。せんさくより子供。朝、目を覚ますとすぐに仏壇に手を合わせ、お早ようございます、お母さん。でも、そのお母さんは私じゃない。学校へ出かける前にも、仏壇だ。行ってきます、お母さん。でも、そのお母さんは私じゃない。それで、帰つてくるとまた仏壇。ただいま、お母さん。でも、そのお母さんは私じゃない。夜、寝る前にも仏壇。お休みなさい、お母さん。でも、そのお母さんは私じゃない。……たまらない。

小間使い どうしてでございますかね。

撫子 家にいる間中、あの子は仏壇を見ている。仏壇の写真を見ている。お母さんを見ている。

(撫子は、険しい表情で、磨いていた写真額を覗め、それからまた、ゴシゴシと額を磨く。)

せんさくを連れた身毒丸がやってくると、アツと叫んで顔色を変え、撫子を突き飛ばすようにして写真額を奪いとる。)

身毒丸 さわらないでください。ぼくの母に指を触れるな。

(写真額を覗め悲鳴をあげる身毒丸。)

母の顔が消えた！ 消えてしまった！

## 10 家の柱

撫子 磨いた位で顔が消えるものですか。お母さんが自分で消したんですよ。早く忘れなさいとさとしてるんです。いつまでも覚えていられると、恋しがられると、この世に未練が残って成仏できない、と、言いますからね。

身毒丸 嘘だ！

(いきなり撫子の頬を平手打ちする。)

火がついたように泣き出す、せんさく。

呆然とする撫子。)

(丸く落ちた明りの中に父親がいる。)

その前に座っている撫子、身毒丸、せんさく。

影絵のスクリーンには、全く同じ状態が映っている。)

父親 今度のことについては、身毒、まったくおまえが悪い。お母さんに手をあげるとは

何事だ。あやまりなさい。

身毒丸 ……すみませんでした。

(両手を突いてあやまる。)

影絵の身毒丸も同じようにあやまる。)

父親 こんなことが表通りの長者の耳にでも入ってみろ。やっぱり生さぬ仲は生さぬ仲だとせせら笑われるばかりだ。身毒、世間では、この家のことをなんと云つてるか、知ってるかね。

身毒丸 ……………。

父親 お父さんがいて、お母さんがいて、子供も二人いる。お母さんは後妻で、二人の子供は血が繋がらないというのに、立派に家族をしている。偉いものだ。余つ程みんなに徳があるに違いないと噂しているんだぞ。

身毒丸 ……………。

父親 おまえは、いずれはこの家の大黒柱だ。それなのに、いつまでたっても、子供ではどうしようもない。おまえは、学校の成績もいい。素行も悪くない。それなのに、どうしてお母さんに心を開かないんだ。おまえにくらべれば、せんさくは、成績こそ中の中だが、儂をお父さん、お父さんと慕ってくれる。それにおまえのことも兄さん兄さんと甘えている。可愛い。血を分けた実の子より、他人の子が可愛くては、どうにもならないじゃないか。今日のようなことがつづけば、儂はおまえをあきらめて、家の柱にせんさくをえらぶ

ことになるかも知れんぞ。

身毒丸 ……お父さんがそうしたければ、そうして下さい。ぼくはお母さんのお位牌を持って家を出ます。

撫子 そんなことはさせられません。

父親 世間がなんと言うか。何事も世間あつてのことだ。

(うなだれる身毒丸。)

いつの間にか、影絵の家族からは、父親が消え、せんさくが消え、撫子と身毒丸の二人だけになっている。

この家は、立派な家なんだ。お父さんに、お母さんに、子供が二人。四本柱が揃って、なんだ。一本欠けることは儂が許さん。いいか身毒。お母さんをお母さんと呼ぶんだ。わかったな。

(無言の身毒丸。)

影絵の中では、撫子と身毒丸が蝸牛かたつむりの歩みで近づいてゆくと、抱擁する。撫子だけが影絵に見入っている。

いきなり)

身毒丸 お母さんは一人です！

(叫んで家を飛び出す身毒丸。)

11 藁人形の呪い

ハッと身じろぎする撫子。

「身毒！」と怒鳴る父親。

撫子 もう駄目だ……。身毒はどうしても私を母とは呼んでくれない。あとは、鬼となり、夜叉となり……。

(影絵の中の撫子と身毒丸は抱き合ったままだ。)

(流れ込んでくる合唱曲。)

「今日もかなしと思いか

藁人形に釘を打つ

いとしきひとと知るゆえに

藁人形に釘を打つ

(やってくる撫子。)

撫子 有りやの眉の

夕月に

髪はまもなく

肩過ぎむ

(唄うともなく眩き、あたりを見まわす。

その撫子に呼びかけるように、

独唱で、)

花散る里に嫁ぎきて

何に惑まどいし愛欲の

(撫子、台詞で応えて、)

撫子

夢のわが子の肌ならで

なべて遠きを傷いたむべし

(独唱で、)

ここへと膝を指さして

招けば目にはうなずけど

撫子 三十弦の弦きって

(台詞で、)

爪投げすてて身は逃ぐる

(立ちどまる撫子)

ほらほら、これがわが子の爪だ。母の乳房になづみきて、甘え立てたるむらさきの、爪切りおとし、たくわえし、黒塗り匣ばこに十二年、まだやわらかく、いとけなく、夕べの月に、似しさまは、指につまめば、身も細る。

かわいそうに、おまえは連れ子。旅芸人の芝居小屋から買われてきた、うしろゆびの小学生。これも観世音の、前世のたたりかな。もとはといえは、長男だったものを、何の因果か、この家に嫁ぎきて、花とは見えぬ、身毒丸を兄と呼び家継ぐことも、かなわざる。

(爪に語りかけるように)

でもせんさくや、安心おし。

ことあるごとにわたしに楯つく、あの身毒は母の呪いできつと早死させてやるからね。もう終わらせなくちやいけない。身毒と私が一つの家にいれば、地獄になる……。

この卒塔婆には、ホラ、身毒丸の戒名がもう十五文字。

(独唱で、)

ゝされば大悲の観世音

みずからこれまで参ること

わが子を氏子に参らさむ

こうして、あたしのてのひらの上で砂のようにさらさらとこぼれる、おまえの爪。三日月なせる、この爪がうずく乳房を突かぬ朝とて無かりしものを。(と、黒塗りの小匣にしまつて、紅の紐をかけ) 安心おし、せんさくや、兄の身毒は私の呪いで、まもなく死ぬのだよ。身毒さえ死んでしまえば、何がなんでもおまえが家督……。

(独唱で)

ゝ鍛冶を頼みて宿をとり

六寸釘をば 夜にあつらえ

夜だに明くれば 清水きよみずの

地獄詣りの 紅い華

(撫子、身毒丸の戒名を書いた卒塔婆をとり出して、六寸釘をあて、金槌をふりあげる。

そこへ目かくしした身毒丸が入ってくる。)

身毒丸

むなわけすぐる はるがすみ  
めいどののはての いちりづか  
ねみだれやすき わがははの  
みじかくつめし くるかみを  
たずねてくれば こはいかに  
思いがけぬところに立っているのは、  
まぎれもなく生みの母のうしろすがたか。

もしや、おっ母さん！

(はつとして、思わず六寸釘と金槌をうしろ手に隠す撫子。)

その匂いは……。 (と、にじりよって) やっぱりそうだ。(溜息まじりに) とうとう、地獄  
でめぐりあえたのだ。(と、撫子に抱きつく) ぼくは今、ママ母にいじめられて、まんじ  
りともせぬ夜をすごしております。お母さん、ぼくは先立って逝ったあなたを恨んでいる。

(合唱曲がそれを受けて)

へと、泣く泣く泣く泣く

乳房の母の

ひと違い

抱きついてくる身毒を  
弄いぢばんとせんものか

撫子 そうかえ、そんなにひどいまま母なのかえ。

(歌)

と、作り声、作り声

身毒丸 はい、おっ母さん、あれは鬼です。お父さんは、どうしてあんな女の色香に迷うて

しまったものやら。

(撫子、ぐっとこみあげてくる怒りをおさえ、身毒丸の、まるで妻でも愛撫する  
ような手つきに身体はあずけたままで、)

撫子 その女は、おまえを可愛がっておくれではないんだね？

(独唱で)

ぐぐっと抱きよせ まぼろしの

母が女にかわるとき

足につまづく石ころが

身毒丸 石かと思ったら、こんなところに小匣が……………。

(拾って紐をほどこうとする。)

撫子、思わず本性あらわして、)

撫子 お止し、しんとく！ その小匣にさわつちやいけないよ！

身毒丸 その声は……………！

撫子 そうだよ。この声はあたしだよ！

(と、束ねた撫子の花櫛を抜くとバツサリと黒髪が肩に落ちる。)

身毒丸、驚いてまま母をつきとばして逃げようとするのを、ハッタと睨みつ

けた撫子が)

かわいいわが子のせんさくのため、おまえさんには気の毒だが、呪いを授くるのさ。

(と、金槌をとり出して、卒塔婆に六寸釘を打つ。)

(合唱が、)

〽身毒丸は十八歳 十八本の釘を打つ

月の七日が縁日で 七日七本釘を打つ

そりゃ一本

(卒塔婆に六寸釘一本、思わず右目をおさえてひっくりかえる身毒丸に、)

〽つづけて二本

景色が腐る

(今度は左目をおさえてのたうつ身毒丸に、和太鼓のとどろき。)

七の社に七本打って

いま宮殿に十四本

継子ままこにくしや十二本

御霊殿ごれいでんにも十二本

目まなこつぶれよ十二本

水神すいじん鍛立てて十二本

母の呪いの十二本

夜叉ヶ池にも十二本

(まま母が、釘を一本打つたび、目を抑さえた身毒丸がのたうちまわる。いつのまにか身毒丸が二人にふえ、三人にふえ、どんどんふえながらのたうちまわる。まま母、鬼子母となって打ちまくり、黒衣たちがそれに呼応しながら藁人形に釘を打ちまくる。)

のろい (釘打つ) 掛声

くろかみ (釘打つ) 掛声

くぎぼさつ (釘打つ) 掛声

はかしよ (釘打つ) 掛声

あかおび (釘打つ) 掛声

さんぜんり (釘打つ) 掛声

ははなればこそ (釘打つ) 掛声

くぎをうつ (釘打つ) 掛声

まなこつぶれる (釘打つ) 掛声

ままこしね (釘打つ) 掛声

しねしねしねしねなむあみだぶつ

しねしねしねしねなむあみだぶつ

(連打、掛声、血煙あがって、数人の身毒丸、すっかり動かなくなってしまう)

折りかさなる。

まま母、けたたましく哄笑する。

(合唱曲が、)

へ祈る験しよしのあらわれて

その上呪い強ければ

一百三十六本の

釘の打ちどが傷となり

にわかにな眼つぶれたり

あいたわしや 身毒丸

あいたわしや 身毒丸

(盲目となった身毒丸、一人ずつ両眼をおさえて薄い光明をたずね乍ながら去って

ゆく。まま母、仁王立ちで卒塔婆をおおう黒髪を乱したままそれを見送り)

## 撫子

縊くびられて

藁人形に血と咲きし

真つ赤な芥子の花ことばかな

(遠くの人の声で、山鳩がほうほうと呼びかわしあううちに、暗転。)

12 命の母の人さらい

(小間使いと仮面売りが、掛合いで節をつけ)

小間使い 法医学、見世物芝居、ほととぎす。

仮面売り 秋が去って春、春が去ってまた次の秋でございます。

小間使い 按摩たちは、夜のつれづれに風の音を聴き乍ら、いろは四十六文字を缺で切って並べかえて遊びます。

仮面売り いろは、いろなし、ゆりれうす、ろけんやだいは、あらだらに、あらだらにだらの、人さらい。

小間使い 『家の光』新年特別号の、口絵になって、行方不明の身毒は、どこへ行ったか、隠れたか？

仮面売り 両眼怪我して家を捨て、あとの家督はせんさくが、仏壇みがついて、菊活けて、母の期待に応えます。

小間使い いろはにほへと、ちりぬるを、ちりし、ちぶみの、ちのみごや。

(小間使い、不意に歌い出す。)

いさあさあさあ 因果はめぐる糸車

からくりまわって渡り鳥

まなこつぶれたしんとくは

どこへ行ったか かくれたか

風の噂もきかないよ

からくりからくり からくりばったん

あとに残った まま母と

つれ子と父は 日もすがら

仏壇みがきに明けくれる 二一てんきやくごくらく天作五九六九の

家族合わせの一枚を

風がめくれれば もう秋だ

からくりからくり からくりばったん

いま頃どうしているのやら

まなこつぶれたしんとくは

真実一路の巡礼の

鈴を鳴らしてさまようか

鉄道線路に身を投げて

なむあみだぶつ 散ったのか

からくりからくり からくりばったん

(小間使い、足音に気付いて歌い止め、物陰に隠れる。)

箒を持って、現われる撫子。その足許に、まるで箱庭のように一軒の家、電柱、そして仏壇。)

撫子

(じつと見おろし) ほらほら、これがあたしの家だ。そろそろ夕暮れどき、電気がともる。せんさくが学校から帰ってくる。また、人さらいが葉売りに化けて、電信柱のかげからせんさくを待ちかまえている。活動写真のビラが風にめくれる。せんさくが立ちどまる。

(撫子、不意に箒で、家、電柱などを掃く。家も、電柱もバラバラになり、塵芥のように掃きだされてしまう。)

暮れてゆく、秋の日の、こともなし。

(一つかみの土をとりだして、舞台の上に蒔き乍ら、)

さあ、これがほんものの土だ

ここに、もいちど杭打って

旅芝居の小屋を建てようか

からしの花の ててなしご

乙女おとめにありし日のごとく

蛇の鱗に泣きくれて

わが身 狂気のしおらしや

パラリ (と土をまく)

パラリ (と土をまく)

それにしても、せんさく今日は帰りがおそいわね。

(あたりを箒で掃き乍ら去ってゆく。)

と、ゆっくりとまぼろしのように芝居小屋の天幕が浮かびあがる。

その破れ目から中を覗いているせんさくに母の仮面をつけた撫子が近づいて

ゆき、そっと肩に手を置く。)

撫子

(舞台外から声のみ) こんなところにいたんだね、せんさく。

(せんさく、驚いてふりむく。)

(声のみ) あんまり帰りがおそいので、母さん迎えにきてやったんだよ。

(と、せんさくを抱いたまま、二、三步あるいて、母の仮面を投げ捨てて笑う。)

せんさく (ハツとして) あ、おまえは!

身毒丸 そうさ、俺はおまえの兄の身毒だ。おまえの母親に呪われて、まなこつぶれた身毒だ。

せんさく (息荒く) 何をしに帰ってきたんだ、身毒。

身毒丸 おまえをかわいがってやろうと思ってるね。俺を呪い捨てたまま母の仮面をつけ、ま

ま母に化けて帰ってきたのさ。どうだい、似合うだろう? この緋縮緬ひぢりめん。

せんさく (後ずさりながら) おまえは、もう家族の余分だ。お父さんとお母さんと僕とで家族の三角形はでき上がってしまったている。

身毒丸 (耳を貸さず) さあ、せんさく。逃げずにこっちへ来るんだ。いいことを教えてあげよう。

(独唱で)

へいと恋し

赤き櫛もて梳きやれば

慈悲心鳥の

羽抜けやまず

せんさく いやだ、そばに来ないでくれ。

(言うが、声は震えて金縛りにかかったように動けない。)

身毒丸 ああ、その怯えた顔が、また可愛いよ。せんさく。(と、にじり寄る)

せんさく 来るな、不潔がうつる。

身毒丸 そう、兄弟は一つだ。おまえにも同じように不潔のたのしみを頒<sup>わ</sup>けてやるのさ。

(と、せんさくの学生服もズボンもすっかり脱がせてしまう。全裸にされたせんさくを、ひしと抱きよせて、いきなり)

死ねーッ!

(と、突きとばす。

もんどりうってころげるせんさく。それを弄ぶように狂い踊る身毒丸。

灯の消えた天幕に、豆電球が点滅する。

放浪の芸人たちが、太古や銅鑼を打ち鳴らして一斉に踊りだす。

それはさながら、地獄の曲馬のように全裸のせんさく少年を生贄にして息を吹きかえした吸血の夜のひとときとなるのだった。

飛び出してくる小間使いと仮面売り。)

小間使い 身毒が狂った!

(絶叫する。)

(侏儒車こびとくるまに乗せられた、身のちぢんだ父親が現われると、)

父 親 身毒もせんさくもいなくなつた。家がこわれた。僕はもう、自分自身の遺失物。引  
取人不明の忘れ物だ……。

(ブツブツ呟く。)

父親の進路を塞ぐように、仮面の印鑑の顔が次々に現われ、田中、山田、中  
川、日吉、小林、工藤といった認め印が唄い出す。)

気なにかしらねど ゆうぐれに

あおい輪廻りんねが泣きじやくる

たよりにならぬ父ゆえに

身はみにくくもあやつられ

知らぬ他国を三千里

わが子いづこと  
らっぱぶし

今日も今日とて 放浪の

とんぼがえりや皿まわし

なかによく似た子がいれば

もしやとこえを

かけてみる

親のふしまつ 子のふこう

巡礼鈴をきくたびに

あおい輪廻が泣きじゃくる

(侏儒車の中で泣きじゃくり、もだえ、狂いはじめる父親。

「身毒!」「許してくれ」とくりかえす。)

父親  
儂にはもう、家のハンコがないんだ! 世間から見捨てられたんだ。

(認め印たちは父親の侏儒車を押して、去ってゆく。)

## 犬印安産帯のはてな？

(独唱で、)

へながれゆく

川のさだめの櫛巻の

櫛の高さの

愛染平野あいぜん

(ボツと30ワットのマツダランプがともると、廃墟となった家では、撫子の着物を着た身毒丸が家族合わせの札を手に坐っている。)

(独唱で、)

へ家恋し

また暗闇をきしませて

髪切虫が

髪を切る音

身毒丸 お父さん、家尾守家のお母さんをください。せんさく、金野成吉家のお母さんをく

ださい。お母さん、国尾護家のお母さんをください……。

(と、呟いている。)

どこにも母札がない。

(入ってくる撫子。)

撫子 その札なら、あたしが持っているよ。ほら、全部、母札。

(まきちらす。)

身毒丸 あなたは？

撫子 撫子。

身毒丸 真昼は人目避けながら

撫子 呪い殺した身毒を

身毒丸 時にいとしく思い出し

撫子 日傘で顔をかくしつつ

身毒丸 墓地のあざみを摘みにゆく

撫子 赤く咲くとも鬼あざみ

身毒丸 なさけはあつく燃ゆるとも

(独唱で、)

へふたり歌わむ一節の

なかば穢けがせしわが呪い

撫子 (不意に若い女のように恋い乱れて) ああ、身毒、許しておくれ。この家を買われ

て来てから私はおまえに……。

身毒丸 (憑きものが、おちたように) だが、ぼくはおとなになるのが、おそすぎた。

撫子 子守歌など唄ってやるには、もうおとな。

身毒丸 抱かれ寝るには、まだ子供。

撫子 八十九百まで添うて、

身毒丸 死んで別るる中でさえ、

撫子 花のうてなが露ほどの

二人 神も許さぬ母と子の、

身毒丸 (不意に母の着物を脱ぎ捨てて) お母さん! もういちど、ぼくをにんしんしてく

ださい。

撫子 (身毒丸を抱きしめ、) もういちど、もうにど、もうさんど、できることなら、おま

えを産みたい。おまえをにんしんしてやりたい。

身毒丸 僕には見える。閨は蓮華れんげの花盛り、観音菩薩の濡れ仏。夢中遊行の白い伏床に、あ

なたと僕の蓮の船。

撫子 耳には、じんと空鳴り。体の芯の、昏い闇だまりに、炎。その色は、あせてもなお華やかな酔いを残して男……。

身毒丸 あなたは撫子。

撫子 あなたは身毒。

二人 家は、もう消えた。

撫子 月も月立つ月毎に、積れる罪は夜の霜。未来の罪を尽くすまで、

身毒丸 抱いて下さい、抱いて下さい。恋は修羅、いのちは炎、はるか底に墜<sup>お</sup>としても下

さい。

撫子 外は雪の、闇。門を閉ざして世の中の話は、見まじ、聞かまじ、語るまじ。忘れるがいいんです。ほら、ここは暖かな、真昼。陽ざしが降るよう、あふれるよう。空よぎる陽炎<sup>かげろう</sup>のように、沢わたる風のように、さあ、お抱きなさい。あたしの体を。

(二人、抱き合う。)

如法暗夜の墓の船。いつか、いつですか、ゆうべか、今夜か、前世でしょうか、私たちがけが、舵も櫓もない舟に乗せられて、波に流されました。人の海に漂い出ました。世間という名の蓮華燈籠。

身毒丸 さあ、行きましょう。顔を失くして、名前を失くし、忘れられるために出て行くのです。

(現われてくる人々。)

立ち上がって、その人々の中にまぎれ込んで行く、身毒丸と撫子。  
行方知らずの道行である。)

へあなた死んだら俵につめて

いろはにほへと ちりぬるを

ちりしちぶみの ちのゆめに

ゆきなすはだを おしげなく

土佐の清水へおくります

土佐の清水は海より深い

底は油で煮え殺す

母さん 顔なし 名前なし

時間たりない 寝足りない